

【表現学関連分野の研究動向】

国語科教育

渡部 洋一郎

2019年における国語科教育研究の動向について、表現に関連した研究と実践の両面から2つの学会誌を取り上げ、特徴的な論考を抜粋した上で、その要点を以下に示したい。

まず、全国大学国語教育学会による『国語科教育研究』では、第85集と86集において6本の研究論文とそれぞれ1本の実践論文、資料が掲載された。両集において特徴的だったことは、国語教育史的な観点からの論文が目立ったことである。例えば、第85集における「石森延男と第5期国定国語教科書—第二次世界大戦期における文部省への招聘理由と執筆教材」(宇賀神一)では、時代の要請に石森自身がどのように向き合い、合科主義に基づく教科書編纂や対外的な日本語普及のための教科書を作成したのか等が丹念な資料の読解に基づき、精緻に考察されている。また、同じく第85集の「吉田彌平読本にみられる書簡文教材の一考察—芳賀矢一読本との比較を通して—」(中嶋真弓)では、大正初期に発行された吉田彌平の高等女学校向けに編纂された読本の検討を通して、明治期から大正期、そして昭和に至る過程で主要な指導項目となっていた書簡文の教授が、実際はどのように展開されていたのかを詳らかにしている。いずれの論考も、従来必ずしも十二分に検討されてこなかった、大戦前後の混乱期における教科書編纂の実態や、大正期における女子教育の実態の一端を明らかにし得ている点で評価されよう。

また、86集では「漢字の学習方略の獲得を促す指導内容の検討—田中久直氏の漢字教育論を中心に—」(長岡由記)が注目される。ここでは、音訓や漢字の構造、漢字機能の理解と適用等が小学校の書写指導やローマ字指導とどう密接につながっているのかが田中が構築した学習システムに沿う形で丁寧検討されている。実践にも示唆を与えるという点で興味深い論考であろう。

一方、日本国語教育学会による『月刊国語教育研究』では、No.564に「日本人学生と中国人学生の母語による意見文の構成の違い」(大野早苗)がある。日中の学習者に関する意見文構成の相違については、すでに日本語教育の分野でも研究の蓄積が見られるが、この論文は日中の学習者が同じテーマに基づく日本語表記の意見文を比較するのではなく、多文化間共修という観点から同一テーマについてそれぞれの母語で書かれた意見文を検討の材料としている。分析を通して、文字数・形式段落数・意見の配列順序・特定の要素の欠落等がデータとして示され、それぞれの国における教育の特徴を反映した結果となった。

また、No.566では、「児童作文における『理由述べ』表現の実態」(宮城信)があり、小学校の全学年を対象に「将来就きたい職業(ゆめ)」を課題とした産出作文の検討を行っている。論文では、理由が述べられるパターンにはどのようなバリエーションがあるのか、児童の作文に事実と理由の表現の不整が起こるのはなぜなのかを考察しており、国語教育の現場における混迷する理由付け指導の一端が垣間見え興味深い。(上越教育大学)